

中国における図書館事業の萌芽と、秦漢皇帝の功科

松見弘道

はじめに

地域的には乾燥地帯でありながら、沃土に恵まれたチグリス、ユーフラテス両川の流域に、メソポタミア文化の曙光¹が見え初めたのは、3000B.C.ころであると言われている。

やがて、他の地方よりも早くから新石器時代に入ったが、ここでまた肥沃で、雨量も豊かであるナイル川一帯に、文明が開花したエジプトと並んで、世界最古の農耕社会が生まれた。まさしくこんにちまで、オリエント文化の温床として、各国の学徒が雲集するような、文化圏を形成してきたのである。

一方では、モンスーンの影響を受けて、湿潤地帯でもあるが、沃野を控えて農耕に適したアジアの南にあっては、中国からビルマ、インド、さらにはペルシャ湾頭を含む地帯のうち、チベットに源流する2900キロメートルにも及ぶインダス流域を巡っては、これまた同じころにはすでに、冠たるインダス文明が栄えた。1500B.C.ころには、ドラビタ族を圧迫してアーリア人が侵入し、光輝あるベータ文化を形成している。より下ってB.C. 3世紀には、言うまでもなくアショカ王により仏教が興隆したごとく、インドにあっては南アジアの中心として、ゆるぎない文化的地歩を築いてきたのである。

さてこのインドとは、北はヒマラヤ山脈で接していて、日本の25倍にも匹敵する、ソ連、カナダに次ぐ世界第3の、広大な国土を擁しているのが、中国民族である。殊にまた、いまや世界最多とも言える10億近い人口を有する巨大国であることも、紛れもない事実である。かかる事情を背景にして、むかしをたどってみると、さきの3か国とはやや新しいとも言われるが、実に古い時代に、黄河中流域の沖積平原全野に

わたって分布し、定住した漢民族によって、それこそ、華やかな広域国家を形成してきたのである。

このようにエジプト、メソポタミア、およびインドとともに、世界における古代文明国の一つである中国は、さきの3国のような西南ならびに南アジアの古代文明諸国とは、地理的位置がはるかに離れているために、もとより文化的孤立性を運命づけられてきた。

ここに言う地理的孤立性とは、元来、東アジアの一角に占める日本列島とて、同じ置位にあるが、しかしながら他方では、中国とは直接陸続きであるという宿命を負荷してきた朝鮮半島は、歴史をさかのぼると、強大な勢力をほしいままにした秦、漢帝国や、ときにその周辺で権勢を誇った少数民族によって、ひとたまりもなく版図を広げられ、言わば勢いに乗った、当時の中国の、一郡県として統治された、いきさつをもっている。

それにもかかわらず、一小国に過ぎなかったわが国のばあいは、それこそ東アジア第一の強国であった中国とは、海を隔てた列島であったればこそ、実に政治的、経済的にも、さらには軍事的にも、直接侵攻されることもなかったのである。かえって緩衝地帯であったとも思われる朝鮮半島が君臨していたこと、ないしは、必ずしも常に天気晴朗ではなかったが、東シナ海という公海を控えているため、そこを經由して有形、無形のさまざまなかたちで、早くから、東アジアに先駆けて開花していた中国の古代文化を、巧妙に摂取することができたことは、あらゆる意味において、当時の弱小国日本にとっては、極めて有利な条件に恵まれていたと言われよう。

さらに記憶を新たにしたいことは、貝塚博士があたかも、“世界史の奇蹟である¹⁾”とさえ強調しておられる一事である。思うに、さしも輝かしい古代文明の精華をたたえていた母国のエジプト、メソポタミア、インダスはじめ、クレタ、インカ、ギリシャ、ローマなどの古代諸国が、いずれも影を潜めているこんにち、ひとり中国のみが、苦難に満ちた動乱の世を嘗²⁾めてきたにもかかわらず、厳然として民族の独立を維持している、まさに悠久の歴史的現実は、見逃せない。

筆者がここで反省したいのは、まぎれもなく中国の図書館界においては、日中戦争による不幸な時期を経て、文化革命の動乱期、ないしは林彪³⁾による破壊期を過ごしてきたこともあって、いまや世界の図書館情報の理論と技術のレベルから、著しく後退している現在、わが国では考え及ばないことであるが、かつての周総理や華主席の呼び掛けからはじまって、国力を挙げて図書館事業や出版界を高揚し、いわゆる4つの現代化を達成しようという旗標を掲げて、その実現に燃えている現状が、ひしひしと伝わってきていることである。

しかしながら日本にとってみれば、俗称されているように、一衣帯水の隣国ではあるが、何と言っても以下にも触れるように、日本文化発祥の祖国であり、一大先進国であったことを、ゆめゆめ忘れてはならないのである。

筆者はさきごろ、本学の厚意によって訪中することができ、あたかも北京大学はじめ、武漢大学、開封師範大学や、孫文ゆかりの中山大学等を訪ねて交歓した際、異口同音に聞いたことは、立ち遅れている中国の図書館界は、先進国、とりわけ日本の、図書館人士の指導を仰いで、躍進を期したいと言う、日本に対する限りない期待感であった。

ところが万事に機械化され、近代化されてきている実状を踏まえて、ややもすれば図書館人も含めて、過去幾千年かに及ぶ隣国の恩恵を忘却して、日本の優越性、独自性を誇るあまり、いかにも中国に対して、すべてにわたって援助の手を差し延べるがごとき根本思想と、驕⁴⁾り

高き行為は、謙虚に慎まねばならないことを、まず拙稿の出発点として筆を進めたいと思う。

訪中行の途次、たまさかに黄泥の逆巻く黄河のほとり、鄭州邙山提灌站の一角にぼう然と立ったとき、はからずも、はるか往時のことが想起されたのであるが、なるほど記録に表われているだけでも26回その流れを変えてきたと言うところから、水を治めるものは天下を治めるとさえ歌い続けられたのである。さこそと首肯される蘊蓄⁵⁾深い説明を、責任者の陳書林氏から感慨を込めて聞かされたが、まさしく、大げさに言えば、黄河こそは、日本民族の原点ではなからうかとさえ、ふと思えてならなかった。

短絡的かも知れないが、この思いは、次のような一事で、さらにつのっていったのである。

故事来歴の濫觴⁶⁾の地と言ってもよい中国には、李白の秋浦の歌に見える白髮三千丈という形容がある。相対比するように、黄塵万丈という現実的な句が残っているが、そのことにまつわる物語を報告したい。

ときに、さきの鄭州から、古い歴史に満ちた開封へ移動する、日本トヨタ産のマイクロバスのなかにおいて、身をもって体験した事象であるが、案内役の現地通訳子によって、はじめてそのスケールの大きさ、歴史的事件の意義に驚くばかりであった。はからずも乗り合ったバスの、ガラス窓めがけて降り懸かってくる黄土の砂塵は、さきの4～5万年前と言われる第4氷河期に、連日雪のごとく降り注いで、数百数千年の間に、5～60メートルにも堆積⁷⁾して、黄土層を形成したと同じ砂塵なのである。このような黄土地帯に発祥した古代の中国民族こそは、仰韶⁸⁾文化、次に続く龍山文化の元祖であり、20世紀におけるアジア文化の祖先とも言える。実にこのあたり、4000B.C.ころ、石鋤⁹⁾で農土を耕し、石斧¹⁰⁾で樹木を切り開き、はだして狩猟に駆け回っていた仰韶文化の担い手たちの姿が、筆者の目に、一瞬だぶってきた思いである。

名にしおう故宮博物院や、鄭州や広州の博物館等を訪れて、石器時代の産物はさておいて、言わば奴隷制社会における、人間の手造りとは思えないほど精巧美麗な、かずかずの産物に接

して見ると、末学である筆者の予備知識をはるかに凌駕³して、日本文化史の源泉は那辺にありやと追求するに当たっての解答は、いまここにも用意されているようにさえ痛感された。

当然のことながら、東アジアの一角に浮ぶ一握りの孤島、日本のすべてと対比するとき、その歴史の悠遠さ、規模の雄大さの象徴ともいべき文化的秘宝が、延々こんにちまで伝承されてきたのである。

さてこのような栄誉を孕⁴んでいる中国ではあるが、もとより謎⁵のベールに包まれた一面は免れることはできない。とは言え、全く驚異的な勢いで、全土にわたり、一大組織をもって、周知のとおり秘境にいたるまで丹念に、掘り起こされつつある成果を、世界各国が興味と期待を込めて注視しているところである。すなわち人類発生の始点、例えば古人類の頭骨発見からはじめ、殷王朝の解明にしても、史籍や推量に出発していた古代史を実証するに足る果実が、時々刻々に発掘されて、諸般の分野から地道な検討が進められている。

そこで筆者は、この波瀾万丈の中国史に、文献ないしは図書館と言うフットライトを照射したとき、映写されたいくつかのことがらを取り上げて、極めて断章的であるが、これまでも小論してきた。本稿でもその一環として、次回に予定している中国図書分類史上に見られる、うねりに富んだ確執、ひいては我が国における漢籍分類法上の苦悩について述べんとするに当たっての導火線的な立場から、主題のとおり、主として黄河文明以降、殷代の甲骨文字にはじまり、漢帝国の崩壊までの、およそ1800年に及ぶ、激動の、筋書きなきドラマを、平凡に時代を追って通覧してみたいと思う。

については、文献の国とも言い習わされている中国のそれは、陳登原による『古今典籍聚散考』、姚名達による『中国目録学年表』の名著を生んだとおり、まさしく苦難に満ちた、書籍の集散を反復してきた3千数百年であった。

そこでいま西洋図書館史上に目を転ずると、ヘレニズム文化の母胎として人口に膾炙⁶されてきたアレクサンドリアの大図書館も、シーザ

ー (Jaius Julius Caesar. 102-44B.C.) の率いるローマ軍の手によって、プトレマイオス・ソテール一世 (Ptolemy Soter 367-283B.C.ころ) 以来、血と汗をもって収集整備されてきた70万卷を上まわるといわれているパピルス (papyrus)⁴ 本は、ひとたまりもなく灰燼⁵に帰してしまったのである。中国のばあいでも全く例外ではない。ひとたび正史、ないしは王朝史所載の芸文志、経籍志等をひもとくと、酷熱、洪水をはじめとする自然による災害は言うまでもなく、たび重なり、反復されてきた戦火や、白蟻の浸食、ねずみによる災厄にいたるまで、古来からの王宮文庫、秘閣楼はじめ、管理が至難の民間の蔵書室⁵に及ぶまで、いかばかり、永久に不帰の財宝になってしまったか、その書厄⁶たるや、想像を絶するものがある。

そのような悲惨、痛恨極まりない史実は、太古からこのかた中国の凶書、図書館史上を血塗らしているが、しかしながら、かかる計り知れない災害をもたらした反面には、これまた古来から賢帝や英雄が傑出して、官府を問わず、民間を問わず、くまなく、あの手この手の手段を弄⁷して採訪、収書し、校讎⁸、整備に努めてきた涙ぐましい物語も、数多く伝わっている。

よって上述したような背景を念頭において、まずは中国においてはどのように書き物が発生し、ひいてはいかなる姿で図書館事業一般が芽生えてきたであろうか、その間の素朴とも思われる事情を考察したい。次に秦始皇以来、後漢末までにいたる歴代皇帝の行状と、図書館行政との関係について、乏しい史料ながら管見したいと思う。

図書館業務発足の曙⁹と光

春秋時代の幕明けは、『春秋』の記載によると、一般に魯の隠公元年 (722B.C.) とされているが、『史記』はさらに約120年もさかのぼって、西周末期の第10代厲王が専制を振ったために、貴族をはじめ一般民衆に及ぶまで反感を呼んで、ついに王都を追放された841B.C.をもって出発している。当時の国情から端的に考えても、春秋時代以前に、すでにもう王室文庫を中心に、公

私にわたって簡策、版牘、縑帛⁸⁾などを材料に書写された書き物が存在していたことが推し量られるのである。

ここで中国における書籍の起源について触れるに当たっては、その第一人者と目される北京大学図書館学部の劉国鈞部長の名を挙げなければならない。1980年6月27日に逝去されるまで、多年にわたって薫陶を受けてきたひとりとして、この方面に関する2冊の高著を推奨し、根拠をそこに置いて、次のように結論づけたい。

a. 現存する中国最古の記録された文字としては、1899年、王懿榮⁹⁾によって、河南省安陽県小屯村で発見された殷墟甲骨文字である。この甲骨は、占卜（うらない）に使って、関係する記録をあとから刀筆で記入し、当時の史官によって、公文書館の書庫に保管されていた。こんにちもその発掘と解説が続けられているため、1300B.C.から、1100B.C.前後までの、歴史、社会、文化一般が、解明されつつある。

b. そのころすでにまた、青銅器が作製されていて、その表面に記念的な文章や、重要な文献を刻んだり、鋳込んだりしているのので、その銘文はまた、図書史上重要である。

c. 世界各国の原始人の習俗同様、石に文字を刻んでいる。現存する最古の石経は、陝西省から出土された石鼓である。

d. 甲骨文と青銅器の銘文は、記念的な文字を記録することが目的であるから、書き物としての作用は備えているけれども、やはり正式の書籍ではない。石の書き物は、人に読ませるのが目的であったため、ようやく書籍に近づいてきた。

e. 最古の書籍は、竹簡、木札を、韋（なめし革）やひもで編んで、複数にしたものを策と言ったが、少なくとも1300B.C.前後には使用されていた。使われていた期間も長く、のち縑帛（しらぎぬ）が出現し、紙が発明されてからでも、利用されていた。

こんにち続々発掘されていて、前述のように解説が進められているので、当時の様子が闡明にされつつある。

如上に取りまとめた書き物の起源を考慮しな

がら、次に図書館業務発生のいきさつを検討しよう。

かねて論及した¹⁰⁾こともあるが、まずはじめに、概して史官の手になり、孔子も筆を加えたと言われる魯の隠公元年（722B.C.）から、哀公14年（481B.C.）にわたる242年間の事跡を、年代記風に載せている『春秋』の記事に基づいて、そのかみの帝室図書館の様相を探ってみたい。

- a. 虢仲、虢叔、爲文王卿士、勲在王室、藏於盟府。〔僖公5年—677B.C.〕
- b. 周公、大公、殷肱周室、夾輔成王、成王勞之而賜之盟、世世子孫、無相害也、載在盟府、大師職之。〔僖公26年—656B.C.〕
- c. 夫賞、国之典也、藏在盟府、不可廢也。〔襄公11年—641B.C.〕
- d. 晉之從政者新、子姑受功歸、吾視諸故府。〔定公元年—606B.C.〕
- e. 王若日、晉重、魯申、衛武、蔡甲午、鄭捷、齊潘、宋王臣、莒期、藏在周府、可覆視也。〔定公4年—603B.C.〕
- f. 叔孫日、書在公府而弗以、是廢三官也。〔昭公4年—538B.C.〕

以上は『春秋』に見られる記録であるが、またその他の史料にも

- a. 紬奇冊府、綏百代之遺編。〔晉書、葛洪伝論〕
- b. 詔日、仰惟祖宗、建開冊府。〔宋史、社志〕
- c. 先王之所謂策府。〔穆天子伝、2〕

等、見られるが、ここに言う府とは、府庫すなわち文書や財貨を収蔵している倉庫のことであって、当時所蔵していた典籍は、王室ないしは官府にあっては盟府、故府、冊府、策府と称せられていた書楼に収納していて、しばしば名山にもたとえられていた。諸侯のばあいは、周の字を冠した周府に、大夫のそれは、公を冠した公府と呼ばれる文庫に保管されていたのである。

もちろんこんにちのごとく、広く庶民の間に一般公開されていたわけではなくして、特定の王侯貴族階級の、学術研究の府であり、公文書

館であり、蔵書楼であったことを、脳裏に置かねばならない。このような過去を捕らえて、封建時代の図書館は、ブルジョワに奉仕したものとして、文革時代には、ずいぶん批判、討論の俎¹¹⁾上に乗せたことは、耳新しいところである。

いまにして思えば後述するように、歴代の帝王は、それこそたび重なる天災や人災に遭遇しながらも、一面では内府の権力や威光によって採訪、復興が繰り返され、厳しい管理がなされてきたればこそ、何千年にもわたって縷々¹²⁾伝承されてきたのである。

ついでには現存する最古の目録学文献とも言うべき班固の『漢志』所載の、次の記事をながめて見よう。

自春秋至於我国、出奇設伏、変詐之兵並作。漢興、張良、韓信序次兵法、凡百八十二家、刪取要用、定著三十五家。諸呂用事、而盜取之。武帝時、軍政楊僕措撫遺逸、紀奏兵録、猶未能備。至于孝成、命任宏論次兵書爲四種。〔兵書略〕

この事件は、呉孫子兵法82篇をはじめとする兵書53家、790篇、図43巻の目録を解説した文中に見られる一篇である。

つまり春秋から戦国にかけて、奇計を案じて伏兵を設け、うまくかけひきをするよう、戦略が整えられていた。前漢が興るや、後述するが、蕭何とともに3傑と称せられていた〔史記55. 前漢書40〕張良、韓信は、協力して兵法の校書を行ない、182家の分類目録を作り、重要事項を取捨選定して、35家に要約したことを伝えている。まもなく漢の高祖の皇后の一族である呂氏(後出)に盗み取られたのは、その6年(201 B.C.)のことである。

ここで後述するとおり、『漢志』序の巻頭を見ると、武帝は、そのころ図書が散乱し、礼楽がすたれたのを憂いて、元朔元年(124 B.C.)には収書の方策を立て、蔵書府を設置し、書写の官を置き、経典はもちろん、諸子の伝説にまで及んで、宮廷図書館に収納しているのである。そこでさきの引用文のごとく、さらに軍政であった楊僕に命じて、天下の遺書を採訪、収集させて、兵法目録を編集したのであるが、未完に

終ってしまっている。

しかし孝成のときになると、任宏に命じて、意見を聴取したうえで兵書の整備を行なわせたところ、こんどは4種に編集することができた、というのである。

もとよりその詳細は知るよしもないが、いまを去る2180年あまりまえ、すでに中国においては、こんにちの眼識からすれば精粗の差こそあれ、学術知識を系統立て、典籍を分類し、兵書関係のみであるが、その目録を作った萌芽が読み取れることに首肯されるであろう。

さてこのような帝室文庫は、一体どのような人士が、その管理、運営に携わっていたのであろうか。その消息を文献のうえで拾ってみると、まず『史記』には

司馬氏世典周史、惠襄之間、司馬氏去周適晉。〔自序〕

と出ているが、周室においては、諸侯はみな専任の司書官として司馬氏が任ぜられていたようである。では春秋時代はいかがであったろうか。『春秋左氏伝』を見ると

周襄王詰籍談之言曰、且昔而高祖孫伯鬻¹²⁾晉之典籍、以爲大政、故曰籍氏。〔昭公15年—527 B.C.〕

このように晋代では籍氏が司書官に専任されて、大政に参画していたようである。かくして春秋以来、帝室文庫を中心に貴重な書籍を収蔵し、専任の司書官を任命して管理、運営に当たらせ、国立図書館の揺籃¹³⁾期を形成していたのである。

ではかかる背景のなかにあって、いまひとつ、例えばそのような典籍類は、いかなる整理方法がとられていたのであろうか。後述するように、漢の武帝時代になって向¹⁴⁾、歆¹⁵⁾父子による宮廷蔵書楼の一大整理事業が決行されるまでの間、果たして図書の分類法はいかがであったろうか。同じく『左氏伝』の記事を掲げよう。

魯哀公、三年夏五月辛卯、司鐸火、火踰公宮、桓僖災、救火者皆日、顧府。南宮敬叔至、命周人出御書。……子服景伯至、命宰人出礼書。〔哀公3年—492 B.C.〕

この記録によると、魯の宮殿であった司鐸が

ら火が出て、火勢は君主の御殿を飛び越えて、桓公、僖公の廟に及んだとき、一斉に宮廷の文書や典籍を収蔵している倉庫を救うように呼びかけた。南宮にいた孔子の弟子で、周書や典籍を司っている敬叔が駆けつけてきて、周人に命じて御書を搬出させた。そこで大夫の子服何は、百官の統率者であった冢宰ほうの属官である宰人に厳命して礼書を運び出したがために、よくその難を免れることができた様子が、生き生きと書き残されている。

この一大事から察せられることは、三大夫の権衡にはそれぞれ軽重があって、その蔵書の保管に当たっては、身分に応じた書楼、ないしは書架を区別していたのである。その際、専任の司書官によって、整然と類別して、排架されていたことがうかがわれる。

次に『左氏伝』には、おなじみの

左氏倚相、相趨過、王曰、是良史也。子善視之、是能讀三墳五典八索九丘。〔昭公12年-530B.C.〕

の記録が見られる。ここに挙げてある三墳、五典、八索、九丘は、もとより古来から、太古における書物の名称であると言われているが、楚国の王室文庫に、果たして現実に所蔵していた典籍の書名であろうかと、疑いたくなるのである。諸橋轍次博士は、諸説を一表に掲げておられるが、早くからあまりにも異説が多く、しかも、あまりにも大差があり過ぎるのである。

よってこのことをめぐり、ひとまず五典の記事について考えてみたい。

『国語』周語上に、典は典籍を謂うとあり、また『爾雅』釈詁には典は常なり、あるいは『後漢書』曹褒伝論注には、典は法則なりとも見えている。言わば典とは、書冊が机の上に乗っている形、あるいはきまりと解してみると、五典は直ちに書名ではなくして、まず五とは数詞であって、つまり当時の函架番号ないしは分類記号であると解せないであろうか。

このことに関連して、次の古典からも類推してみよう。『周礼』に

大宰之職掌建邦之六典、以佐王治邦国、一日治典、二日教典、三日礼典、四日政典、五

日刑典、六日事典。〔天官、大宰〕

とあり、『礼記』には

天子建天官先六大・日大宰・大宗・大史・大祝・大士・大卜、典司六典。〔曲礼、下〕
また『古文尚書』にも

慎徽五典、五典克従。〔舜典〕

天敘有典、勅我五典五惇哉。〔皐陶謨〕

等々の用例がうかがわれるように、ここに言う五典、六典は、それぞれ書名であるとは断言し難い。如上の趣旨から三墳、八索、九丘いずれも、書名ではなくして、整然と主題別に排架されている書架の番号ではなかろうかと推察するのは、飛躍し過ぎであろうか。

追って夏、殷時代の書籍、および春秋時代において触れなかった書籍、とりわけ図書分類法に関しては、前掲の拙稿¹⁴⁾に譲りたい。

始皇帝の功過

いまここで述べんとする時代的背景は、始皇帝が即位して以降、秦漢統一帝国の国家構造の上に形成された史料を下敷きにすると、その間に織り成してきたドラマは実に多彩である。この戦乱絶え間なかった400年余りに及ぶ有為転変の興亡史に照準を合わせたとき、この過酷な背景に押しつぶされることなく、けなげにも生き抜いてきた文化的宝庫を模索してみたいと思う。

さて周の平王が、陝西省の鎬京ほう（陝西省長安県の西南）から洛陽へ遷都した年（770B.C.）から数えて550年にわたる春秋戦国時代は、まさしく中京一帯に群雄が割拠して、血肉の抗争が相続いていた激動の戦争史であったが、ここに終止符を打って、天下統一の偉業をなし遂げたのは、ほかならぬ、歴史の寵児、始皇帝であった。

39歳にして王位に就いてから、わずか15年の短命王朝であったが、その間、権勢をほしいままにして決行してきた辣腕らつは、後世の青史を、あまりにもにぎわしていると言ってもよからう。

もとより秦の孝文帝は、即位するや3日後に急逝してしまっただが、そのあとを継いだ莊襄王も、王位にあること3年目（247B.C.）に逝去し

てしまった。あとがまがその子、始皇帝である。史記、始皇本紀第6の冒頭によれば、莊襄王が、秦のために人質となって趙に行ったとき、相国の呂不韋の妾に見ほれてこれを娶り、生まれたのが始皇である。秦の昭王の48年正月のことであるが、邯鄲¹⁵で生まれたので、正月にちなんで政と名づけられたのである。姓は趙であった。そこで父の死にともなって、弱冠13歳にして秦王に即位したのが、始皇帝、政である。

やがて秦国の伝統によって、22歳という成人に達したかれは、母の太后と、商人から出世して、その全権を掌握するまでになっていた相国の呂不韋らにまかせていた政権を、自ら執行することになったのである。

それよりさき、太后と関係のあった呂不韋は、艶聞が露見することを慮って、その愛人として、宦官という名目で嫪毐¹⁶を与えたのである。ところが、しだいに権勢をわがもの顔にするようになったところから、秦王政は、一方の嫪毐を車裂きの刑に処し、そのうえ母を雍に幽閉したのであるが、のみならず、その間に生まれた2子までも、殺害してしまった。反乱するのを恐れて、蜀に隠遁させられていた呂不韋自身も、服毒して、悲劇的な末路をたどってしまった。

この嫪毐の乱を境として、始皇の側近に、第1の実力者として登場してきたのが廷尉（大審院）の李斯である。かれの献言は、すべて無条件でまかりとおるまでの地位にのし上っていた。

以来、執行されていった始皇帝の行為は、この腹心の家臣である李斯の意見具申を全面的に採用して敢行されていった。目覚ましい政策として人口に伝わっている第1は、まず封建制を廃止し、36の郡県制を全国的に施行して、各郡ごとに守（行政官）、尉（武官）、監（監察官）を置くとともに、国家機構や幹線道路を速やかに整備した。かくして中央政府の専制力を、あの手この手で強化したのである。

てはじめに貨幣、度量衡、文字を、短期間に、全国的なかたちで統一したが、後世への影響も極めて大である。こんにち見られるように、そのころ布銭、円孔銭、刀銭など、各種の形や重さで通行していた貨幣を、半円の重さで、中央

に四角い穴のある円形の青銅貨に標準を置くようにした。¹⁵また法度（ます）、衡石（はかり）、丈尺（ものさし）を統一し、車の軌（はば）を同じくした。文字の改進においては、甲骨文字や青銅器の銘文のように、書体がまちまちであったものを、一説には李斯の発案になると言われる篆¹⁶書体に統一した。金石文がこれである。あるいは年始を改めて、朝賀の儀式を10月に行った。さらには衣服、旌節¹⁶、旌旗¹⁶（はた）は黒色を良しとし、数は6を基本に、符節（割印、門鑑寺）や法冠（かんむり）の長さは6寸に、輿（くるま）は6尺、一步は6尺、乗車の馬は6頭だてに統一した。黄河の名を徳水に改めたが、これらは五徳¹⁷のなかの水徳にちなんだためである。

ここでさらに始皇帝の暴挙について述べるまえに、いまひとつ、功罪半ばするもろもろの事業について触れなければならない。

言ってみれば、専制始皇帝の誇大極まりない着想から、自らの権勢をたればばかりことなく発揚して、やり遂げてきた壮挙は、世紀にその名を留めている。

膨大な奴隷や農民を苦役にかり出して造営し、いまにしてなお威力を発揮している全長30キロに及ぶ南方靈渠運河の開発には、50万人を動員したり、北方においては、4000キロ余にわたる万里の長城の築造に、30万人の罪人を駆使しているし、東西約700メートル、南北約150メートルの広がりがある、その堂上には1万人が坐れるという大規模な阿房宮の建築には、70万人がかりたてられている。高さ115メートル、周囲2000メートルに及ぶ自らの陵墓である、豪壮にしてしかも精緻な始皇陵の大土建事業には、75万人の刑徒が使役されたことなど、当時の総人口2000万人とも言われたうち、推計300万人にも達したとみられる無償の労役を強制して、意のままに実権を振り、帝威のいたるところ、専制横暴の威光を構築してきたのである。

功罪おのおの枚挙にいとまがないなかでも、いよいよ強調しなければならないのは、後述するように、漢代にいたるや、ときの書き物ないしは文化的遺産等の収集、整備、保管、愛護と言う、さまざまな動機による大事業に、歴代の

皇帝が、申し合わせたように施政方針として掲げてきたその引き金は、所詮、始皇帝による悪政中の悪政、焚書坑儒の妄政であろう。

213B.C.、はからずも咸陽宮で催された天下統一の大祝勝会の酒宴で、始皇帝側近のひとりである周青臣のあげた祝杯が発端となって、宴席は荒れに荒れた。このとき献議した股肱¹⁸⁾の丞相である李斯の意向を尊重して決行した、殘虐至極な弾圧政策については、本稿においても特筆大書しなければならない、書厄の筆頭である。

と言えまづ、厳しい思想の弾圧を強行するため、李斯が奏上した言葉は、次のようである。

わたくしは史官の取り扱かう秦の記録以外は、すべて焼却し、また博士官が職務上保管している儒家がものした詩、書、諸子百家の著作は、ことごとく郡の守尉に徴集させて焼き捨てる。あえて詩、書について討論するものがあれば棄死¹⁹⁾し、古をたたえて、いまをそしめるものがあれば、一族をみな殺しにし、官吏でありながら、これを見逃すものには同罪を科し、命令が出てから30日以内に焼かないものがあれば、入墨を施し、毎朝出勤して築城の労役に服する徒刑囚である城旦に処したいと思う。ただし医薬、卜筮²⁰⁾(うらない)および種樹(うえつけ)に関する書きものだけは例外とし、もし法令を学ぼうとするものがあれば、吏をもって師範にしてはいかがであるか、〔史記、始皇本紀第6〕と。

始皇はこの意見を裁可したのである。かくして世に言う、焚書令が発布された。

このように暴戾な抑圧政策のあおりをもちに受けた竹木の書、帛²¹⁾に書写された書き物は、あえなくも灰燼に葬られてしまったのである。あたかも始皇帝の35年(212B.C.)のことであった。なにしろ紙が発明され、世に出まわる300年以上もまえのことであるから、竹簡、木札をつづり合わせて作った簡策か、帛書かである。よって、めらめらと燃え上る火の手は何日も続き、火の粉は夜空に舞い上って、遠くからも望見できたさまが、そぞろ寒くうかがわれる。目前のはかなさに加えて、怒濤²²⁾のごとく押しまくった津波は、さらにとどまるところはなかつ

た。

かくも強硬な焚書政策を敷くことによって、為政者に対する言論の統制、ひいては徹底的な弾圧手段を謀ったのであるが、もとより儒生のうちには、すんなりと屈服することなく、狂気のごとく権勢をほしいままにした皇帝を、陰に陽に攻撃するものが出てくることは、自然のなりゆきであろう。

あまっさえ驚かされるのは、第2の圧政が断行されたことである。禁令を犯した儒家たち460余人を、すべて咸陽に集めて穴埋めにし、天下に公表して、民衆の面前で懲らしめ、見せしめにしたのである。また、ますます罪人を摘発して、辺境に追いやった〔史記、始皇本紀〕。

さきに挙げたように、禁書令を発布したその翌年(212B.C.)には、坑儒事件を起こし、やがて阿房宮や始皇陵の造営を終えた始皇帝は、ことさらに皇帝の威光を津々浦々に輝やかすため、第5回目の巡遊に出発した。そのまた翌々年のことである。始皇本紀によれば、左丞相の李斯がお伴をし、右丞相の霍去疾²³⁾が留守を預かった。寵愛されていた末子の胡亥²⁴⁾も連れて行かれた。その途中、揚子江を舟で下って、浙江省の銭塘にいたり、浙江を渡ろうとすると波が高かったため、西のかた120里の狭中から渡って会稽山に登り、大禹を祭って、南海を望んで刻石文を建て、秦の徳をたたえたのである。

その挙句、不老不死、不老長生の仙薬を求めてやまなかった皇帝は、その入手を妨げているのは大魚のためであると信じきっていたおりから、首尾よく之罘²⁵⁾(山東省福山県の東北にある半島)までさしかかったとき、海中に現われた巨魚を見事に射殺した。気を良くしていたところ、海岸に沿って西行し、平原津(山東省徳県の南)まで来たとき発病してしまった。主上の容態は日々悪化して、もろくも7月丙寅の日、沙宮の平台で崩御した。享年50歳であった。ところがここで帝の喪を発表すると、都の外では、崩御を知った諸公子や天下のものが乱を起こす恐れがあると判断した李斯の意向で、隱密裡に輜涼車(冷暖房車)に載せて、暑気のことであるから、におい消しのため、1石の塩魚を遺体の脇に載

せて、都へ帰還したのである。このようなすさまじい隠密行を知っていたのは、司馬遷〔始皇本紀第6〕によると、同行した帝の末子である胡亥と、趙高および、そば付き数人の宦者だけであったと言う。途中も平常のごとく奏事の決裁を行ないながら、すぐさま相はかって胡亥を太子に昇格させた。やがて井陘、九原を経て咸陽に着くや、はじめて喪を發表し、晴れて太子の胡亥が二世皇帝の座に就いた。その9月、始皇を自らの酈山陵に葬り、子供のない後宮は殉死させ、陵内には、工匠を駆使し、人智の限りを尽くして精巧な宮室を造り、ここに貴重な副葬品を収容し、とどのつまりは埋蔵品のことが外部に漏れるのを恐れたため、この大事業に従事した多くの工匠たちを、ことごとく埋め込めてしまった。ときに皇帝21歳であったが、帝はまた趙高を郎中令として政務を一任し、父始皇帝にならって海内にその強勢を威示するため、李斯を同伴して、その春、天下の巡遊に出掛けた。途中、始皇の建てた刻石の傍らに、自己弁護の刻書をしたのである。4月には咸陽に帰り、酈山陵は完備したとして、先帝の遺業を受けて、未完成であった阿房宮の造営工事を始めた。これがため膨大な使役をかり出し、天下の勇士5万人を徴集して防衛に当たさせたが、これらの食糧確保のため、300里以内の百姓は、自分の植えた穀物も、すべて供出させられてしまったのである。

さてこのような暴政のゆくては、平隠無事では終わらない。結果は火を見るよりも、明らかである。まもなく後述するように、中国最初の、農民による大暴動が蜂起^{ほうき}した。まさに燎^{りょう}原の火のごとく燃え広がって行って、天下を嘗^なめ尽くす勢いであった。早くもその9月には、劉邦、項羽などの反乱が各地で勃発^{はつぱつ}するし、果ては二世皇帝へ奏上した李斯までが曲解され、大罪に値するときめつけられてしまった。つまりは咸陽において、子供の李由ともども腰斬²²⁾され、そのうえ3族（父と子と孫）みな死刑に処してしまった。いかにもあわれた末路であった（史記、李斯列伝第27）。ときに二世皇帝の3年（207B.C.）2月のことである。

ところがその8月には、失脚した李斯のあと、丞相に特昇した趙高が、なんと中国史上はじめての、皇帝弑逆という大事件を起こしてしまった。つまり反乱軍に投降した旧秦軍の將兵に対して、おのれの安全を保身するため、皇帝に馬と称して鹿を献上することによって、侍臣たちの意向が、わが身に傾いていることを確かめたうえで、婿の咸陽令である閻樂^{えんらく}に命令し、部下1000人余を与えて、皇帝を宮廷において弑殺してしまったのである。すなわち、望夷宮の殿門に攻め入って、守衛長を切り、弓を射ながら殿中に進むや、逃げまどうもの、あるいは格闘を演じて戦死するもの、数10人に及んだ。かくして主上の御座所の幃^{きぬ}を射たれた二世が怒ったので、閻樂は進み出て、驕慢放恣^{きょうまんほうし}で、無道にも人を殺してきたからこそ、天下のものはみな叛^かくのである。よって自ら身を絶つがよかろう、と責めたてたのである。もはやこれまでと自害した。

ところがそれから越えて9月には、趙高自身も、公子嬰^{いん}のため、刺殺されるという憂き目に遭わねばならなかった。公子嬰とは、秦王になった胡亥の甥^{せう}であるが、すぐさま二世の遺体は庶民の儀式によって、杜南の宜春苑に葬った。ほどなくして即位の儀式を行なうため、5日間の潔齋をして齋宮殿に入ったとき、この場へ趙高を呼びつけて誅殺するのみか、その一族を咸陽でみな殺しにして、人民に見せしめた。これこそ公子嬰は、趙高が、じぶんを殺して秦王の玉座をねらおうとしているという、あさはかな猜^{あやま}疑心からの行動であった。

なんと殺戮^{ころ}相経巡る、実に劇的な秦王政であったが、内外の史実が示しているとおおり、長期政権は維持されるものではない。農民革命の火の手は天下を揺るがせるところとなって、さしもの暴虐非道、過酷誅求を極めた3代にわたる秦帝国も、現実には次つぎに血塗られて行って、なんと15年という薄命王朝に終わらねばならなかった。

しかもなお、時代の風雲児、始皇帝の極悪無道な暴政を浮き彫りにしている焚書、坑儒の強硬手段を進言した皇帝の懐刀であった李斯自身

も、前述のごとく、三族ともども憂き目を見なければならなかったが、なんと皇帝の死後、わずか3年という、宿縁にも似た、あわれな悲劇的終焉であった。

ところが秦の焚書は、取り返しのできない悲しむべきできごとであったが、民間に所蔵している典籍が対象であったため、内府や博士の文庫に所蔵していた官本が無事であったことは、いかにも騒乱中の好事であったと言わざるを得ない。

顧みるに、彼我の長い歴史には、かずかずの涙含ましい事例が現になお残っているように、人の常として、例えば宗教的迫害に逢着した信者たちが、身をもって本尊や経典、ないしは仏具一式までも護持しようとする、ひたむきな信仰心から、厳しい追手の目を逃れて、山間辺地の洞窟に隠匿したり、壁のなかに塗り込むなど、あらゆる挺身的防衛手段を講じてきたことが、言わば美談として伝えられている。そこにはおのれの生命をかけて、それこそ命がけで擁護してきた守護神こそは、到底、官憲の手をもってしても、皆滅することは不可能であったという明白な事実については、首肯される場所である。

なるほど、時代や民族がいかに異なろうとも、あれやこれやの奇縁にも似た動機が相まって、まこと気の遠くなるような、3000有余年前の書きものが、さきにも述べたように、はかり知れない圧政や、度重なる、それこそさまざまな受難時代をくぐりながら、はるばる伝承されてきたのである。

高祖と蕭何、項羽

司馬遷の『史記』を見ると、巻頭の本紀には、始皇本紀第6に続いて、項羽本紀第7、高祖本紀第8と順序して掲げ、書、表に続く世家篇の第23に、蕭相国世家の一篇を記載しているが、その間のかかわりあい、巡り合わせを思い返すとき、実に意義深く、興味が尽きない世相が再現されるのである。

なぜならば、かねて述べたように、万世にとどろく始皇帝の大秦帝国も、天下を統一してか

ら15年という短命にして、三世公子嬰は、206 B.C.10月には、劉邦の軍門に降り、2か月後には、咸陽において、項羽のために殺害されるのみか、諸公子、宗族までも皆殺しに遭っている。阿房宮も焼かれ、驪山陵もあばかれたが、その翌1月、論功行賞を断行した項羽は、勲功のあった討秦軍の諸将はじめ、六国の旧王族や秦の降将18人に、それぞれ領域を与えて、一国の王としての地位に就かせた。自らは西楚の霸王を名乗っておいて、楚の懐王は義帝として奉り、以下の諸将は、大小の差こそあれ、項羽の差し金による版図を賜わった王族たちは、おのがじし、各地へ赴任していった。

かくして、秦代に強行された郡県制の天下は、一気に廃止されて、封建制が復活したのである。これぞ高祖元年(206 B.C.)4月のことであるが、なんとしても、僻遠である漢中の領土を封ぜられた劉邦にしても、討秦軍の最高指令官であった項羽の命とは言え、腹中、爆薬を抱える思いで任地に赴いたことであろうが、例えば、戦国時代からの齊王の田氏一族らにとっても、火中の栗を見るごとく、一触即発の危機を孕ませ、それぞれの封国へ従って行った。はたせるかな、この理想的国家体制を目論んだ項羽構想であったが、1か月ともたずに、血で血を洗う破目が待機していた史実は、筋書きどおりであるとして、たれしも受けとめられるであろう。

ほどなく翌5月には、分封された漢中に飽き足らない劉邦は、好敵手とも目される西楚の霸王、項羽への恨みを晴らすべく兵を起こして、次つぎと版図を確保していった、郡県制の復帰を計った。ところがその年の10月、項羽は、義帝として推戴してきたのも名目上のことであって、おりを見て、目の上のこぶを無きものにしようと、ここに九江王に封じていた楚の將軍英布に命令して、懐王を弑殺してしまった。この事件は、いよいよ軍勢を拡大しつつあった劉邦にとってみれば、項羽に対して、堂々と対敵行動に出るのはいまこそとばかり、けしからぬという口実を作って諸王を督励し、項羽軍撲滅作戦に出たのである。かくして宿命の抗争は繰り広げられていった。

この対決の模様を描いている項羽本紀の記載は、まさに圧巻である。東城に追いつめられた項羽は、従うものわずか28騎、漢の追撃兵は数千人からあったと言う。もはやこれまでと見た項羽は、従騎に、顧みるに戦うこと8年間、70余戦、無敗を誇ってきた。しかしながらここにいたって、天はわれに味方せず。もとより死を覚悟せり、との言葉を残している。やがてまもなく後世に残る四面楚歌の故事、虞美人草(ひなげし)の史話は、かくして生まれたのである。

接戦の果て、項羽自身も数百人を殺したが、自らも10余箇所を負傷をこうむっている。ついにいまやこれまでと、漢はわしの首に千金と万戸の邑を懸けていると聞く。わしの首はおまえに差し上げようと言って、漢の騎司馬である呂馬童の面前で、自害した。項羽32歳、漢王の5年(202B.C.)のことである。

さてまた死闘すること5年にして、念願をかなえた劉邦は、その年2月甲午に、池水の北岸にある定陶において、大漢帝国の始祖に就き、長安を都として君臨することができた。ところがなんと高祖自身も、帝位にあること7年にして逝去し、その2年後には、後述するごとく、高祖のこんにちあるは宰相によるとまで思われてきた腹心の蕭何までが、これまた死去してしまったのである。

このような悲運極まりない歴史劇のあとをたどるとき、同じ舞台で演ぜられてきた存亡の戦いには、いかに喜劇性と悲劇性と両様が潜んでいるかと言う実態は、世に言う小説よりも奇なりと思われるところである。

あまりにも天下取りをめぐる抗争してきた項・劉のふたりは、あまりにも好対照の人物同士であった。

項籍は下相(江蘇省宿遷の西)の人、字を羽と言った。季父を項梁と言ひ、父は楚の將軍項燕で、秦將の王翦に殺されている。項氏は代々楚の將軍を継ぐ家柄であつて、項(城は陳州項城縣東北1里にあり)に封ぜられたところから、項なる国名を冠して、項氏を名乗ったのである。項籍は若いころから文字を習つても、劍

道を習つても、体得することができなかつたが、叔父の項梁に兵法を学んだところ、概略は了解することができた。

貴族出身ながら籍は、はじめて兵を起こした24歳のころ、すでに身の丈6尺もあり、数10貫の大鼎を持ち上げることができたと言われている。性はいたって才氣煥発で、熱血漢であり、のち梁が会稽(江蘇省呉県)の守(地方長官)に就任したとき、籍は御付武官となつて四隣の諸県を遊説して回り、意のままに従わせるといふ能力の持ち主であつた。〔史記、項羽本紀第7〕

他方、中国史上、農民出身にして皇帝となつた明の太祖朱元璋よりも先んじて、同じく農民の出で皇帝の地位を占めたのは、高祖劉邦である。劉邦は沛(江蘇省沛県)の豊邑中陽里の人、字は季。父は太公と言ひ、母は劉媪(劉氏に嫁した婆さん)と言つて、史記にはその出産ぶりが実に神秘的であつたことを書き残している。生来鼻が高く、顔は龍のようで、ひげは美しく、左股には72のほくろがあつた。性格は寛仁で人を愛し、施すことを喜んで、くよくよしないたちであつた。

高祖は酒と色を好み、常に王媪と武負と言ふ婆さんの居る2軒の酒屋へ出掛けては酒を飲み、酔いがまわれれば、その場で横になるという具合であつた。高祖が店に居ると、不思議に売上げは倍増したと言ふ。そこで暮れの売掛けの借金は、いつも帳消しにしてくれたと伝えられている。史記の高祖本紀第8には、酒飲、酒宴の場面が10回²³⁾出てくるが、一代よほどの酒好きであつたようである。

さて項羽と劉邦、ふたりの相對する性格を表わす逸話が史記に見えている。すなわち項羽は会稽で、劉邦は咸陽で、それぞれ始皇の行列に出遭つたときの言動が、すこぶる好対象であつた一連の物語である。

世に、両雄ならび立たずと言われるが、項、劉の兩者間で、かねて、関中へ先に入つたものが王皇になると言ふ盟約ができていたのである。しかしながら劉邦は、項羽軍よりも1か月早く関中へ進軍して、秦王を降服させ、咸陽を占領下に置いてしまつた。ところが前掲のように、

項羽は楚の上將軍としての家柄であるが、かたや劉邦は、農民出身の一部將に過ぎないところから、著しい性格の相違も手伝って、互いに相敵対しなければならない運命を背負っていたのである。

著名な故事として残っている鴻門の会は、このときに起こった。あたかも史記に載せられている名文は、こもごも織りなす虚々実々、千変万化の悲喜劇で、酒色もからんだ、雄大にして壯絶、緻密ちみつにして巧妙な、言わば、きのうの朋友ともは、きょうの敵、やがて項、劉両者の対敵意識とその行動は、ますます豺狼じやうろうさながらの抗争へと発展していった。

もとより劉邦に1か月さきを越されたりとは言え、項羽の軍は40万で100万と号した。沛公の兵は10万で20万と号したが、力は項羽に及びもしなかった〔高祖本紀第8〕のである。そのとき項羽の季父である項伯は、張良の命を助けようと、夜っぴいて、沛公の従臣である張良に会ったのを機会に、沛公の書簡を項羽に渡すことができたのである。沛公の意中を聞いた項羽は、沛公と合戦することを思い留まった。沛公はわずか100余騎を従え、駆けって鴻門に行き、項羽を表敬訪問してわびた。かれを迎えた項羽は、大酒宴を催してもて成した。

この宴席の座配は、実に意義深長である。と言うのは、これから芝居を描写するのに必要な前奏曲であるから、項羽本紀には、子細に説明している。

項羽と項伯は東面して上座に坐り、亜父の范増（項羽の謀臣）は南面して次席に着席した。沛公は北面して三座に着き、沛公の近臣である張良は、西面して下座に坐った。この宴会の最中に、苑増の悪巧みで、項羽の従弟である項莊を招き入れて劍舞をやらせ、すきを見て劉邦殺害の機会をねらったのであるが、張良が機転をきかせて、樊噲はんたいを呼び出すと、劍を帯び、盾を引っ提げて軍門に入ってきた噲の勇壮さに驚いた項羽は、1升の酒をあほり、豚の肩肉を食べて、沛公を弁護したのである。その機微をねらって、沛公は厠せうへ立ったので、首尾よく暗殺から免れることができたが、それこそ騒然と

して風雲急を告げるばかりであった。

樊噲と張良の機智で、無事に難を逃れて軍営に帰った沛公は、漢の元年（206B.C.）10月、即座に曹無傷を殺し、公子嬰は、劉邦の軍門に降った。

数日すると項羽は、ついに40万の大軍を率いて西行し、12月には咸陽を葬り、既に降服していた秦の皇帝子嬰をはじめ、秦の王族一統を虐殺したうえ、秦の宮殿や阿房宮を焼き払った。それのみか、葬ったばかりの始皇帝の驪山陵を暴き、副葬品の財宝を略奪して、諸將に山分けをした挙句の果ては、火を付けたのである。その他、通過した地方で破壊されないところはなかったと言う。

それよりさき劉邦は、咸陽に入って宮殿内に留まって休息しようとしたところ、樊噲と張良の諫いさめめで、秦の重宝財物の府庫（くら）を封鎖して、項羽の来るのを待っていたのであるが、項羽のため、これらの財宝類はおろか、婦女までも略奪して、東のかたへ帰っていった。さてその火の手は、3か月にわたって消えなかったと記録されているが、現今では、さしもの宮殿も、その土台の跡のみを留めているだけで、陵墓は“今見るものは麦畑の中の方墳と、陵の名を記する石碑のみである”²⁴⁾と言われる。まさに、つわものどもが夢の跡、2200年前の、古い歴史の残骸ざんがいを見る思いであろう。筆者はいま、訪中の際見学した明の十三陵の規模、造作等をとおして、はるかに始皇陵に思いを馳せるとき、想像を絶するものがある。

さてここで、高祖の腹心、蕭何の功績に触れたい。江蘇省沛県の人、そこで行政官を勤めていたころ、いまだ庶民であった高祖を、法律上の問題でもしばしば弁護し、忠誠を努めた。ときに高祖が咸陽へ夫役に赴いた際、他の役人はみなせん別として300銭を贈ったが、何は500円を贈ったと言う、律義りぎを持った第一等の補佐官であった。

前掲のように、高祖が咸陽へ入ったとき、諸將たちは争って金帛や財物を収蔵した倉庫に赴いて、分捕り合いを演じたが、何は独りまず宮殿へ行って、秦の丞相や御史大夫らの刑律、法

令や、書き物類を手に入れ、身をもって保存した。だからこそ、咸陽の火災から、免れたのである。史記の蕭相国世家にも、そのことは大書されている。

漢王所以具知天下阨塞、戸口多少、疆弱之處、民所疾苦者、以可具得秦図書也。

漢王が、天下にある堅固なとりでや、人口の概数、地域の強弱、人民の困窮状態などについて、つぶさに知ることができたのは、蕭何が、咸陽の陥落前に秦国の図書を入手してくれた、たまものである、と。

さらには、入手した図書を守護、管理するため、新たに蔵書楼である石渠閣を造営して、王室文庫の整備に努めた。漢の闕名撰になる三輔黄図、閣には、次の記事を載せている。

石渠閣、蕭何造。其下礪石、為渠以導水、若今御溝、因為閣名、所蔵入関所得秦之図籍、至於成帝、又於此蔵秘書焉。

つまり蕭何は石渠閣を造った。ついでにはその楼閣の下には、荒砥^かで磨いた石を敷きつめて溝を造り、水を導いたので、石渠閣と名付けた。この閣内へ、咸陽で入手してきた秦の図書を収蔵したのである。

さて司馬遷は、蕭相国世家第23を結ぶに当たって、次のようにその生涯の功績を絶賛しているのが、印象的である。

蕭相国何は秦時代に刀筆の吏(書記の小役人)となり、碌々凡庸、人に異なった節行とてなかった。漢の勃興するに及んで、明にも比すべき高祖の余光により、信と謹しみをもって蔵の鍵を守り、民が秦の苛法を憎んでいたため、時勢に順応して民とともに更始一新の大業に従事した。韓信、黥布らは相次いで誅滅されたが、何の勲は爛焉として光り輝やき、位は群臣に冠絶し、名聲は後世に伝えられた。周の功臣閔天、散宜生らと、その功業を争うものと言うべきであろう〔小竹文夫、小竹武夫訳：史記 筑摩書房〕と。

ついでには、その後ずっと下って、宣帝の甘露3年(51B.C.)には、諸儒を召集して講論させ、五経の異本を校訂して、宣帝自らこれを決裁しているが、世に言う石渠閣会議である〔漢書、

施讐伝〕。

上記の引用文は、さらに下って成帝のとき、帝は、いたく典籍が散逸するのを恐れて、宮廷の貴重図書は、石渠閣へ収蔵されたことを物語っている。

かようにして高祖に忠誠を励み、また青史に残る文献擁護の美挙を敢行した蕭何も、高祖崩御の2年後(193B.C.)に、死去してしまった。さて高祖には8人の男児があり、長男は庶子であって、斉の悼恵王肥になり、次は高祖が微賤なときの妃で、専横を振った呂后との間に生まれたのが恵帝である。このとき、始皇以来続いた、書きものにとっては全くの災厄、爆弾宣言たる挾書(蔵書)律が解かれた。すなわち

四年(191B.C.)三月甲子、皇帝冠赦天下、省法令妨吏民者、除挾書律〔漢書、恵帝紀〕。

元来、弱冠17歳にして帝位に就いた恵帝は、上述のように父は高祖、母は生れつき剛毅で、高祖を補佐して天下を治めたが、宿敵であった高祖の別妻である戚夫人の手足を切断し、耳目をつぶしておしとし、かわやの中へ投げ殺したり、劉氏一族を殺害すると言う女偉丈夫であった。ところが恵帝は両親に似ず、気のやさしい柔弱な青年皇帝であった(呂后本紀第9)。張良の策どおり皇帝に就いたが、その翌年に蕭何が逝去したがため、曹参が丞相になった。この丞相は酒づかりの毎日であったが、2回にわたって10数万人の男女を大動員して行なわれた長安の築城工事のさなか、蕭何存命中の遺業とも言うべき、典籍収蔵禁止の掟^きを解く法律が出されたのである。ここに天下晴れて、隠匿されていた書き物が一斉に明るみに出てきて、やがて武帝らによる収書事業へと発展していった。

恵帝は、190B.C.に崩御したが、太后は哭礼中でも涙を流さない剛毅なところがあつた。そこで高祖を諫めて大臣を誅殺した〔呂后本紀第9〕りもした。しかし10年後に病死してしまったため、即位したのが文帝である。一方この帝は22年間、実に仁君の誉れ高く、多くの美しい執政が残されている。自ら宮廷の諸経費や定員を削減したり、農業の奨励、貧民の救済、肉刑の廃止、葬儀費の節減などがこれである。しか

し文帝も157B.C.に崩御されたため、継承したのが、文帝の中子である景帝である。司馬遷も認めている〔孝景本紀第11〕ように、孝文皇帝が大徳を布いたので、天下が安らかになったが、孝景皇帝になって、さらに安泰となった。

かくして、文帝、景帝の2代にわたる和平工作は、いよいよ国家財政の備蓄につながって、やがて武帝の内政、および外政を誘発することになる。

武帝と董仲舒、司馬遷

141B.C.、景帝の崩御に伴って即位したのは、景帝13人の皇子のうち、第9子であった武帝である。歴代およびもつかない薄命の皇帝が多いなかであって、独裁君主として、実に54年間と言う、半世紀を越える長きに及んで在位した意義は、極めて深い。その名のごとく武威を四方に伸張して、大漢帝国の領土を著しく拡大してきたが、自らは先頭きって出陣することなく、専ら文帝、景帝の遺業を伝承し、ちょう愛する董仲舒の献議によって周制を復興し、官吏の養成機関として国立大学を設けた。まず五經博士を置いて、その下には50人の博士弟子を定めるなど、学問、思想、文化の面で取り持ってきた功績には、忘れ難いものがある。既述したように、古代から漢代までの書籍の分類目録とも言うべき班固の漢書芸文志冒頭の記事を、唐の顔師古の注とともに掲げよう。

漢興、改秦之敗、大収篇籍、広開献書之路。迄孝武也、書缺簡脱、礼壞樂崩、(師古曰、編絶散落、古簡脱。) 聖上喟然而称曰、(師古曰、喟歎息之貌也。) 「朕甚閔焉」、於是建藏書之策、(如淳曰、劉歆七略曰、外則有太常、太史、博士之藏、内則有延閣、広内、祕室之府。) 置書写之官、下及諸子伝説、皆充祕府。

つまり漢帝国が興るや、まず秦の始皇帝が断行した焚書坑儒による腐敗政策の災いを改めて、大いに典籍の収集に努め、(賞金を懸けたり、爵位を上げたりなどして) 書籍を宮廷に献上する方途を開いたのである。孝武帝の時代におよぶと、簡策をとじてあるなめし皮のようなとじひもが切れて、竹簡や木札がなくなってしまった

り、順序がくるったりして、礼経や楽経等が、ばらばらになった。(唐の顔師古は、編みひもが、ちりちりに切れてしまったため、竹簡、木札が脱落したのであると言っている)。そのようなありさまなので、武帝は痛み悲しんで言うのに、(喟は歎息のかたちである)、「朕は甚だ嘆かわしいことである」と。そこで宮廷において典籍を収蔵する方策を建て、(如淳が言うのに、劉歆の著わした七略には、外には、宗廟の礼儀を司る太常や、史官および暦法を司る太史や、皇帝の学術顧問官である碩学の博士というような、高官たちが持っている私家の蔵書樓があり、一方、内には、すなわち宮廷の蔵書樓である延閣や、大きな屋根の、内裏の蔵書室である広内、ないしは天子の文庫である秘室がある、と)、校訂の済んだ書籍を専門に清書する書写官を設けて、広く諸子百家から伝説に及ぶまで、凶書の整備事業を行なったので、宮廷文庫は充実したのである。

さきにも述べたように、儒教をば国家公認の思想的原理として掲揚し、執政の根本理念とした武帝であるから、積極的に学問、文化を尊重する結果となった。そこで武帝は、その根本方針を内外に行きわたらせるため採用したのが、当時儒学の泰斗として名を馳せた董仲舒である。漢書、董仲舒伝によれば、幼にして春秋の学を修め、景帝のときには博士になった。自ら学術に精励するのみか、あまたの弟子のために帷^びを垂らし、情熱を燃やして講議したので、学士たちからも尊敬されていた。

武帝が即位して賢良、文学の士を採用すること、前後数百人に及んだが、仲舒も賢良の資格で意見具申するほど、重用されていた。武帝がまた、州や郡の長官が茂才、孝廉(いずれも官吏登用の資格のひとつ)を推薦するようにしたのも、すべて仲舒の献策によるものであることを記載している。これを要するに、漢帝国の文化的な一面、とりわけ凶書の収集政策を執行した影の立役者は、仲舒にほかならなかった。

次に武帝の功績について述べるに当たっては、司馬遷に登場を願わねばならないことは、もちろんである。

中国を代表する不朽の紀伝体の歴史書『史記』は、前漢の悲劇の歴史家であった司馬遷の編集

によるものであることは、言うを待たないであろう。上古の黄帝から、漢の武帝にわたる約3000年にもなんなんとする間の事跡を、本紀12、表10、社会制度史とも言うべき書8、世家30、列伝70、合わせて130巻、526500字〔漢書、司馬遷伝〕という体裁に編集した、綿密にして、膨大な史料を駆使している世界的な大歴史書である。かくして中国史上における正史の元祖として、以後の正史の活模範的な存在である。

伝を見ると、父司馬談は太史公という600石の史官であって、天文学を唐都で、易学は楊何に学び、道家の学は黄子から習って、学者としての誉れが高かった。遷はその子で、陝西省韓城県の北、竜門の生まれ。黄河の北、竜門山の南で農牧に従っていたが、10歳にして古典を暗誦し、20歳からは南や北へと巡遊に出掛け、齊、魯の都では儒教の講義を受けて、孔子に心酔した。董仲舒や孔安国という大家について学ぶかたわら、ときに武帝のお供をして地方巡察に出掛けては、眼識を広げる一方、豊富な資料を収集して帰国するや、天子の守衛官である郎中になったが、公太史公が臨終真際に、遷の手を握って、“わが先祖は、周王室の太史として栄えたが、わしが死んだら絶えてしまう。だからおまえは太史となって、わしが書き著わそうとしている旧聞を記述してくれ。それが親孝行である”と言い遺して、この世を去っていった。

発奮した遷は、やがて3年後には太史令となって、歴史的記録をはじめ、石の書庫、金の櫃らに収納されている文献を渉獵しながら、筆を執ったときは、42歳になっていた。

ところが、まさに99B.C.のこと、武帝は、匈奴討伐を謀った。そのおり、武師將軍広利が西域に出陣して投降せざるを得なかった弁護を、親友であった司馬遷が、堂々と武帝に上奏したのである。このなりゆきを曲解して激怒した武帝は、遷を牢獄ろくに幽閉してしまい、あまっさえ、男子として恥すべき生殖器を割去する宮刑に処してしまった。遷48歳のときである。“このような不具者になって、役立たずになってしまったのも、わしの身から出たさびである”とて、出獄するや、いよいよ隠忍自重、逆境の試

練に打ちかって、やがて文書を司る中書令（600石の宦臣）となるや、かねて収集した資料を子細に渉獵して、ひたむきに没頭し、ついに93B.C.ごろ、完成を見たのである。その間、漢書に見られる朋友の任安にあてた、“昔の賢臣の道義に見習え”という諫言かんげんに対する長文の返信には、いかにも悲運を担っている遷の、涙ぐましい悔悟の情趣が満ちあふれているが、遷の胸中、察するに余りある。

かくして史官としての責任感から、血のにじむような悪戦苦闘の執筆が続けられること約16年、ここに万古不易の名著を生み出したのである。伝によると、司馬遷の死後になって、その書はようやく世に出たもので、宣帝のとき、遷の外孫に当たる平通侯楊惲けいが祖述してから、はじめて広まっていったようである。王莽の時代になって、遷の後裔けいを捜し出して子爵の諸侯である史通子に封じた。

つまるところ、この大天才としての史学者を見出した限りにおいて、とかくの経緯は抜きにして、武帝の慧眼けいは、これまた不滅の金字塔として、称揚されるところである。

成帝、哀帝と、向歆父子

武帝が即位した5年後、五経博士を置いて、官吏登用のための研修会を開いて、前掲のように漢王朝の権威を確立するため、儒教を国教に採用し、行政の指導原理としての旗標を掲げてきたが、昭帝、宣帝を経て、さらにその子元帝の時代になると、ようやく實際政治の運用に利用することを計ってきたのである。

ところで武帝の曾孫であった病己びやうは、民間に下野して、長安城中の尚冠里にあったが、経術に通じていた。ときに21歳で病死した昭帝の枢前きゆうにおいて皇帝を継いだ昌邑王が、帝位を剥脱はくされてから27日めに、皇帝に迎えられたのが宣帝であって、いまだ18歳の青年であった。

この宣帝から、元帝およびその子の成帝に及ぶ、およそ半世紀間は、まさしく前漢200年の歴史上においても、最も文化の薫り高い、平和な時代であったと言ってもよからう。

まず宣帝のころは、漢帝国の絶頂期にあって、ときに人口7～8千万を有したというローマ帝国と対抗するほどであって、当時世界最大の都市と称せられた長安は、人口200万を擁したほどである。他方、学園都市としても栄え、壮大な官立の大学も君臨して、全国から集まった学者、学生はおろか、留学生も含めて数万人を数えたようである。さらには中央、地方を問わず、私塾も発達して、1000人以上の熟生を抱えるところもあった。このような風潮のなかで、かねて述べたように、至極学問に理解の深い宣帝は、石渠閣会議を召集して、古典の大校訂作業を行ったが、典籍の収集、保管に努力されたのである。

人情皇帝であった元帝は、自ら儒学を学び、官吏の登用にも、儒学の修得者を選考した。

その子成帝もまた、学者皇帝と呼ばれたほど、儒学の興隆には情熱を傾けた。すなわち紙が発明され、印刷術が開発される以前の書き物と言えば、前掲のように竹木や縑帛に書写されたものである。それゆえに、誤字が誤字を呼んでいる文献の現状を踏まえた成帝は、まず帝室図書館の整備をするには、校訂作業から始めねばならないことを痛感されたのである。

そこで成帝は、あたかも一世に抜きんでいた儒学者である劉向(81B.C.? - 6 B.C.)に命じて、異本を校訂する事業をはじめ、当時の学匠たちを動員し、苦心を重ねて殺青した竹簡に浄書して、定本を完備した。これを底本として、ここにユニオンカタログ作製という、一大整備事業を起こしたのである。『別録』、『七略』の巨篇は、このような動機から誕生した。

すなわち機械的な分類ではなくして、634部、13397篇に及ぶ、さまざまな内容を備えた文献を、それぞれ学派の系統を見極めたうえで分類し、やがてその目録をも完成させたのである。漢書、漢志、隋書、隋志等に録するところを踏まえて、はるか2000年前に、皇帝の勅命によって逐行された大事業の足跡を、繁をいとわず回顧してみたい。

成帝のとき、秘閣に所蔵している古籍が、すこぶる散逸していたために、河平3年(26B.C.)

8月、宮廷の顧問官である光祿大夫の劉向(りゅうきやう)に詔し、賓客接待官であった陳農を使者として、国郡に遺書を採訪させた。そこで劉向はその子である宮門下の衆事を司っていた歆とともに、経伝、諸子、詩賦の校讎を担当した。將軍配下の高級武官である任宏には兵法書を、司法事務官である太史令で、左氏にも通じていた尹咸(いんげん)には数術(占いの書)を、侍医の李柱国には方技(医薬の書)を、それぞれ分担させて、校訂を行なった。そこで一書ができあがるたびに書誌的な解説を條書して、その要旨をまとめ、これを記録して帝に奏上したのである。これを『別録』と言ったが、これこそ敍録のはじめであって、図書解題の始祖と言われている。ところがこの大事業の統率者である劉向は、前後18年に及んだものの、完成を待たずに72歳で逝去してしまった。さてこの20巻あったと言われる別録は、唐宋時代に亡逸してしまっているが、現存の戦国策や、列子、荀子等に留めているところから、類推するより他なし。

向なきあと、幸いにも有能な3人の子供があって、とりわけ傑出していた末子の歆が、前述のように父業を継承することになった。幼にして諸学を修めていた歆が、父の遺業を継ぐには最良であった。

向が逝世した翌年、成帝も急逝したので、哀帝が即位し、かたわら苦学力行した總理大臣、大司馬になった王莽(わんまう)は、実権を振るい、劉歆を優遇して侍中にした。そこで温室中の凶書を天祿閣のほとりに移転させた。歆(53B.C.? - A.D.23)はようやく群書を総括し、その要旨を書き、分類して『七略』を作って哀帝に奏上したのである。これこそ分類総目録の元祖²⁵⁾であり、歆また、目録学上の端緒を切った碩学²⁶⁾であると言える。ついでには同時に校訂に参加したのは、宮殿禁門のことを司っていた五官中郎將の房鳳(ぼうほう)であり、同じく光祿勳の王龔(わんこん)であった。

七略とは、輯略、六芸略、諸子略、詩賦略、兵書略、数術略、方技略の七分類であって、およそ33090巻より成っている。ここに言う輯略は、NDCの総記に相当すると言ってもよい。ところがこの重要な意義を占める業績も、五代の

乱の際亡失したもののごとくであるが、幸いに正史中には、芸文志ないしは経籍志として6部の図書目録が残っていて、なかでもその鼻祖とも言うべき漢志は、この七略に準拠している²⁷⁾ことから、既述したように高く評価されるところである。実に中国近代の書誌学者である蔣元卿は、向歆父子の遺業を、端的に次のごとく称賛している。七略に関して、借りてもって総評としたい。

剖判芸文、條理百家、遂成一代之偉業、樹千載校讎之基礎。〔校讎学史 台湾 商務印書館 人人文庫本(1969) p.29〕

かくして、漢籍分類目録の始祖と仰がれる偉業を達成した劉歆は、元治元年(A.D.1)、王莽が国政を総覧したとき、その学識を高く買われて、理論的指導者として迎えられたのである。その5年には全国に布令して、五経、論語、孝経はじめ、小学から本草、天文、暦算等に及ぶまで通曉している学徒を長安に参集させているが、そのかず、数千人に達したとも言われている。このような儒教尊重の施政方針は、後世の王朝国家を性格づけるうえで、その影響力は大であった。ところがこの王莽の厚き信頼を得ていた劉歆の晩年はとて言え、衛戍司令官であった衛將軍の王涉、および軍事顧問官の董忠とともに、王莽を殺して漢軍に降伏しようとした陰謀が、事前に発覚してしまった挙句の果て、董忠は誅殺され、劉歆は王涉と相携えて自殺してしまった。よくよく非業の最後へ追いやられてしまったのである〔前漢書、36〕。

一方では政権をほしいままにした王莽も、やがて重圧に苦しむ農民が武装蜂起^{ほうき}したとき、南北から迎撃され、なぶり殺し同然の、哀れな最後を遂げたのである〔前漢書、99〕。まさに地皇4年(A.D.23)正月のことで、夜襲を強行した反乱軍は、城門を突破して長安城内へ侵入したとき、王莽の執政時代から、周囲を池水で築いた豪華な未央宮も焼失してしまっ、麒麟閣と天祿閣の、2蔵書楼に整備されていた貴重な書籍も、あえなく烏有に帰ってしまったのである〔漢書、99 隋書、36 唐六典、10〕。

この2月、南陽清水のほとりに壇を築いて即

位の儀式を行なって帝位に就いた更始帝は、洛陽に遷都し、さらに翌年には長安に入城して、王朝の復旧に躍起となったのであるが、その翌年、赤眉軍の指導者に殺害されてしまった。

光武帝と班固

更始帝に代って、同じく南陽の鄙^びで、群雄を撃破して帝位に就いた光武帝劉秀は、景帝六世の孫であって、中興の祖と仰がれるほど、若くして長安に留学し、儒学を修めただけあって、天下を統一するや、あくまで文治主義をとり、學術を奨励し、都の洛陽には国立の大学を設けて、儒学の素養がある人士を官途に登用した。大学生の数は、後漢末期には3万人を越えたと言われるほど、儒教を行政の根本理念としている。

帝は自ら読書人であったばかりか、深夜遅くまで、高官や將軍を宮中へ召集して、儒学の講習会を開いた。30年の4月には、帝は長安へ行幸し、その翌月洛陽へ帰ったが、そのとき運搬された古籍、文献類は、2000車両に達した〔後漢書、儒林伝序、105上〕と言われる。同じく儒林伝に

自是莫不抱負墳策、雲会京師。

と見えているが、墳策(書物)を背負った儒者たちが、洛陽を目指して雲集してきたさまが読みとれ、当時、いかにも文教都市であった様相が、遠くしのばれる。

この武帝の後継者である明帝、章帝も、父祖同様の学者皇帝で、実に後漢王朝の最盛期であって、仏教史上でも特筆されているが、図書館史上でも意義ある時代であった。

光武帝は在位33年、中元2年(57)2月15日、11人に及ぶ皇子を残して崩ぜられるや、その第4子が即日、30歳をもって帝位に就いた。すなわち明帝である。次の章帝は、その皇太子烜であって、在位12年、33歳の若さで死去しているが、この父子2代にわたって成就した大史書は、言うまでもなく、班固の傑作『漢書』である。

前述したように、史記に次ぐ正史の筆頭で、とりわけそのなかの芸文志は、もとより図書館史上でも、高く評価されているところである。

元来、班固の父の彪^{びょう}は、光武帝のころから、前漢時代の歴史を執筆したいと意図しながらも、逝去してしまった。ところがその子班固は、9歳にして文を能くし、長ずるに及んで博く典籍に精通するほどの俊秀であった。あたかもこのことを耳にした明帝は、司書官とも言うべき為郎に任命して、王室文庫の整備に当たさせた。次いで蘭台文庫の司書官に転任させ、史官ではなかったが、その才を尊重したうえ、父の遺業を受けて、漢書を著述することを命じた。

かくして歳月をけみすること20余年、漢の高祖から平帝の元始5年(A.D.1)まで12代、299年間の歴史を、120巻にまとめて、ようやく完成して献上できたのが、章帝のときであった。十二本紀、八表、十志、七十列伝から成りたっているが、ただしそのうち八表と天文志のみは未完のままであったが、晩年、匈奴遠征に参加して敗れたため、獄中であって、享年61歳にして、あわれ命終したのである。幸いにしてその妹の昭が、兄の遺志を継いで、苦労を重ねて完成したのである〔後漢書、70下〕。班固には白虎通関係の編著も見られるが、ここでは漢書を出色のものとして挙げなければならない。

加えて、いみじくも明帝が行ってきた校定事業についても言及したい。賈誼と言え、紀元前早くも文帝に仕えて、33歳で卒するまで、幼少のころから学門を極めた文秀として名を残しているが、その九世の孫、賈逵^{かゐ}もまた弱冠にして左氏伝や五経の本文を暗誦したと伝えられる秀才であった。左氏伝解詁はじめ、幾多の著書も見られるが、王室図書館の整理事業にも熱心であった明帝は、賈逵の著作を重視して宮廷文庫に収蔵するとともに、かれを司書官に就かせて、さきの班固や楊終らと共同で、校書作業を命じた〔後漢書、66 78〕。

章帝の功績として伝えられているのは、いわゆる白虎観会議の召集である。建初4年(79)、天下に詔勅を下して五経博士たちを招き、班固を委員長に五経の異同を講論させて、白虎通等を編集した。

さらに章帝は、明帝の遺志を受けて、蘭台文庫の蔵書を整備するため、詩賦にも長じていた

傅毅を司書官に任命し、明帝時代から続いている校書事業の陣容を一層強化して、古籍の校定、整理、保管に力を入れてきた。

和帝と蔡倫

在位12年、33歳で逝世した章帝の第4子劉肇は、10歳の若さで即位した和帝である。在位17年、その間の朝政は、主として竇^{さい}大后一族が枢要な地位を占めて、執行していた。帝は24歳の正月に東観文庫へ行幸し、そこに所蔵されている文書、典籍を視察したところ、その整備作業の必要性を痛感して、直ちに図書館業務に練達した博学の文士たちを司書官に発令して、仕事に当たさせた〔後漢書、4〕。

ところで和帝の元興元年(105)と言え、和帝崩御の年であるが、後漢書、宦者蔡倫伝にその名を留めている次の記事は、見逃せない。

自古書契、多編以竹簡、其用縑帛者、謂之為紙、縑貴而簡重、並不便於人。倫乃造意、用樹膚麻頭及蔽布魚網以為。元興元年、奏上之、帝善其能。自是莫不從用焉。故天下咸稱蔡侯紙。

一般に、この一連の物語を根拠にして、例えば唐の李翰(『蒙求』^{もんきゅう}のなかで)はじめ、わが国においても、紙の発明者は後漢の蔡倫であり、その年代は元興元年である、と言われている。

しかしながら前掲²⁸⁾の劉博士は、漢書97下『孝成趙皇后(飛燕)伝』所収の、趙照儀と曹偉能に関する記事に、薄い、小さな紙のことが見えているが、これは前12年の事件であると言われている。また後漢書の『賈逵伝』所収の、漢の章帝が賈逵に命じて、学生に、竹簡と紙に書かれた春秋経と左伝を与えたという記事は、紀元76年の事例であるとしている。これら2件の証拠を挙げて、要するに、105年以前に、すでに一部では紙が出回っていて、同時に紙に書かれた凶書も存在していたことを、強調されている。

については、この蔡倫は桂陽の人、字は敬仲、才学があって、和帝のときは禁中において、常に帝の左右に仕える中常侍(用度係長)の職にあった。そのころ宮中では、公文書や書き物の

材料には、かねて触れたように竹木や帛が用いられていた。ところが竹木の書き物は重いし、他方、帛は生産量も少なく、高価であって、いずれも不都合である。そのようなおり民間ではすでに、蚕による縑帛ではなくして、植物性繊維を主たる原料とした紙が、ほそぼそながらも通行している模様が、男女の宮仕えの人びとから、いきおい、万事に抜け目のない蔡倫の耳に達したのであろう。そこで倫は、樹の皮、麻くず、およびぼろ切れや、魚とりの網を原料にして紙を造ってみたら、思いどおりにできあがったので、和帝に献上したところが、その腕まえを大へん賛美された。元興元年のことであるが、それからは天下の人はみな蔡侯紙と称するようになった、と理解される。

このように考えてみると、もちろん蔡事務官ひとりにより、ひとときに発明されたとはいえないが、正統な手続きを経て、宮中の用品として献納された紙である。不自由を我慢して使用してきた従来の材料にかんがみて、ここで青年皇帝が快哉を絶賛されたさまが読み取れて、これこそ貴重な記録であると言えよう。

ところがこの蔡倫は、安帝のとき貴人をおとしめたと言うかどで、左遷させられたので、これを恥じて、服毒自殺を遂げてしまった。教科書にまで登場するような人物の最後としては、あまりにも非業であった。

和帝のあとを継承した殤帝^{しやうてい}は、生後百日めに即位したが、翌年死去してしまったために、次代を継いだのが安帝である。帝位にあること15年、帝は図書館事業に対しても、傍観者ではなかった。即位して間もなく永初4年には、補佐官である劉珍、その他五経博士らの学匠たちに詔して、東観文庫に所蔵している五経、諸子伝記、百家芸術類の図書を校訂させ、脱誤を整齊し、文字の正誤を是正した。劉駒駘^{りゅうこたい}や馬融^{ばじゆう}らもこの整理事業に参加したが、さきの蔡倫をその取りまとめ役に当たらせている〔後漢書、安帝紀 108、110〕。

順帝は、近衛騎兵隊長であった伏無忌と、文官試補の黄景に勅命して、宮廷文庫の整備作業に従事させた。永和元年（136）のことである

〔後漢書、56〕。

章帝の曾孫桓帝は、在位21年に及んだが、光武帝以来の遺風を受けて儒学の振興にも努め、国立大学の整備、充実を計った。そこで図書館業務に対する理解も厚く、延熹2年（159）には、図書館の管理を専門職とする祕書監を置き、1人600石の祿を与えて、宗廟の礼儀を司る太常に属して、宮中に所蔵する図書や、秘密文書の管理に当たらせるようにした〔漢書、7 唐六典10〕。

霊帝と蔡邕

桓帝崩ずるも子供なきため、12代目に迎えられて立ったのが劉宏で、霊帝はこれである。在位22年、その間における国立図書館の整備事業にはまた、実に見るべきものがある。

まず帝の近臣として仕えていた著名な積学の蔡邕は、東観文庫に保管されている図書の校訂を見事に完成した功績により、郎中から文官試補の議郎にまで榮転した。そこで五官の主任であった堂谿典^{たうせきてん}、宮中顧問官の楊賜、論議を司っている馬日磾^{ばにちてん}、文官試補の張馴^{ちやうじゆん}や韓説、典礼長官の單颺^{だんえい}らの諸学者が、六経の文字の脱誤を校定して奏上したところ、文庫の整備に深い関心を抱いていた霊帝は、いとも満足して決裁された。

邕はそこで自ら得意の達筆を揮って、これらのテキストを書写し、名工に刻石させた。これをば大量に貴重図書を収蔵していた国立大学の門前に建てた。いわゆる鴻都石經である。それがため、この碑を閲覧したり、模写する学徒が跡を絶たず、毎日車で乗りつけるもの千両にも及ぶので、街頭をふさぐほどであった〔後漢書、8、90、94、102、109〕。

このようにして霊帝および腹心の学者であった蔡邕の図書館事業への貢献度には、きりり光るものが見られたが、惜しくも邕は、董卓の専制に遭って、迫害されたすえ、60歳をもって、獄中で最後を遂げた。

霊帝の中子劉協は、在位すること32年、これが献帝であるが、わけても董卓の乱による書厄は甚だしかった。卓は献帝を脅かして都を関中

へ遷したため、官民が騒乱した。そこで辟雍、東觀、蘭台、石室、宣明、鴻都等、もとからあるこれらの図書館に保管されていた帝室の図書、宮中の文献類を、さきを争って散り散りばらばらにしてしまった。そのうち縑帛に書かれた図書で、大きいものは縫い合わせてテントにしたり、小さいものは袋にしてしまった〔後漢書、9、109〕。

また董卓の乱の際、王室を補佐し、呂布と結んで卓を刺した王允かんは、このとき、寄せ集めた70余台分の図書を積んで西のかたへ向かわせたものの、道のりが遠く、難儀であったため、その半ばは再び散逸してしまった。その後はさらに長安の乱に遭ったので、焼けて、ほとんどあとかたもなしにしてしまった〔後漢書、109〕。

靈帝、獻帝の2代に仕えた曹操は、生まれつき任侠けんぎにして放蕩ほうたうであったが、獻帝時代には丞相に進み、さらに魏王に封ぜられるまでになった。一面かれは詩歌に長じていて、その作風は沈雄、俊爽しゆんぱん（格調が高い）で、読者はまた傾倒しないものはなかったほどの、ひとかどの文人であった。よって典籍愛護の精神がみなぎっていたため、獻帝は、かれを帝室文庫の図書館長に任命して秘密の奏事を司らせ、兼ねて図書や貴重文書の管理に当たさせた〔後漢書、9〕のである。やがてこの曹操も、220年正月に逝去してしまったので、その長子の曹丕せうが帝位を譲り受けた。すなわち文帝である。

文帝は洛陽に都を遷して国を魏と号し、黄初と改元した。さていよいよ文帝を祖聖として、魏の時代に入ってきたのであるが、標題のように後漢までの事項を祖述するのが目標であったので、漢代においては、そのうち主たる15人の皇帝に登場を願って、その功科を回想した。

おわりに

拙稿で述べてきた事件は、なにしろ3000年以前からのできごとである。よってこんにちのごとく、シャンデリアのもと、テレタイプや電算機が輻湊ふくそうし、ロボットまでが、はん濫する情報を処理している時代の、図書館人の眼識からすれば、もちろん違和感を覚えるであろう。あ

えてここに、西欧や日本の図書館史に比し、中国のそれが乏しいことを痛感して、既述したように、近代中国の図書館界をながめるよすがとして、まずかつての先進国であった中国の図書館前史を、我田引水の嫌いはあったが、順次時代を追って、素朴なところから、ひもどいてきたのである。

顧みるに、秦代のそれはさしおいて、漢代の各皇帝は、それぞれ腹心の碩学をはべらせ、善きにつけ悪しきにつけ、その献議によって執政しているさまが読み取れた。しかも不思議なことに、侍臣はいずれも非業の最後へと追いやられている。それにつけても、武威を發揮して戦闘する一方では、勅命によって文献の整備事業に力を注いできた模様は、時代が進むにつれて、より具体化してきているが、やがて中世以降になれば、図書館活動という面でも、さらに活発化してくることは、言うまでもない。

ひるがえってひとこと、こんにちの中国図書館界の勢いでは、恐らく欧米との交流もあって、近き将来ある意味においては、こんにちの先進国に、追いつき、追い越す時代が到来するであろうと、愚考される。

注ならびに文献

- 1) 貝塚茂樹、伊藤道治：中国の歴史1 講談社 (1974) p. 13
- 2) 破壊の詳細については、以下参照
 - ① 松見：新中国図書館事業三十年 日本図書館学会年報 Vol. 26 No. 4 (1980) pp. 206-208 (注 3)の紹介)
 - ② 松見：偉大なる図書館学者 劉国鈞先生 —中国図書館界要人の他界をめぐって— 東海地区大学図書館協議会誌 第26号 (1981) p. 6
- 3) 例えば、武漢大学図書館学部、黄宗忠部長のレポートによると、早くには周總理が、1956年に“関于知識分子問題”の演説のなかで、研究機関や大学の図書費の増額、および図書館や博物館、公文書館の振興を強調したり、全国古籍善本書総目の発行をうながしていることに言及されている。さらに華国鋒主席は、1978年に“図書館の発展、科学研究と図書館網を組成”すべきことを、呼び掛けている。
〔湖北省図書館学会 1979年年会論文選 pp. 1-9〕

- 4) 古代エジプト地方を中心に、3000B.C.ころから、製紙法が発達するまで使用されてきた文書の用紙。主としてナイル河畔に生えているカヤツリ草の一種である、パピルス草を材料に精製したもの。
- 5) 中国では古来から、有名な学者の蔵書室は、すこぶる多い。例えば盧震京著『図書館学大辞典』台湾商務印書館(1971)の付録には、漢代までの歴代蔵書家室名索引を掲げているが、395室に及んでいる。
- 6) 書物が受けてきた災厄について、前掲の陳登原は、政治厄、兵火厄、収蔵厄、人災厄の4厄を挙げている。ちなみに、日本軍国主義による、中国大陸における書厄はさて置いて、満州侵略史の一面を回顧すると、本多勝一氏は『中国の旅』朝日新聞社(1979) pp. 34-5のなかで“瀋陽の小北門里にあった学生書房を中心に、1932年3月から5か月間に、瀋陽だけでも650万冊以上の過酷な焚書が行なわれた”ことを報じている。反省したい。
- 7) 校勘学と同義の独立学。後述するように、劉向が勅命によって校訂を行なったのが、はじまりとされている。諸本を集めて、ひとりひとりが、それぞれ1部ずつを持って異同を討論して原本の復元をするそのさまが、あだ討ちのように見えるところから、かく名付けられた。
- 8) ①劉国鈞：中国書史簡編 北京高等教育出版社 その日本版 松見訳：図書の世界と中国 理想社(1963)、増訂版(1980) pp. 36-55
②劉国鈞：中国古代書籍史話 香港中華書局(1972) pp. 1-44
関連して、次の論文も参照
Edouard chavannes : Les livres chinois avant l'invention du papier. Journal Asiatique. (1905) の訳文 馮承鈞訳：紙未發明前之中国書 中華図書館協会：図書館学季刊 Vol. 5 No. 1 (1931) pp. 47-65
- 9) 竹簡に字を書き写すときに用いる筆と、誤字を削り取るときに使う小刀。転じて筆そのものを言う。また文書や尺牘(手紙)の意にも用いられ、文書を書く刀筆吏(小役人)にも使われた。詳しくは、次を参照
王重民：刀筆考 前掲 図書館学季刊 Vol. 3 No. 1, 2 (1929) pp. 131-3
- 10) 松見：中国図書館の搖籃時代 日本図書館研究会 図書館界 Vol. 6 No. 5 (1954) pp. 145-50
- 11) 中国文化学院図書館研究班：社会主義図書館学概論 日本図書館工作研究会訳 JLA Information Service, N.S. Vol. 2 No. 1 (1961) pp. 28-68

以上のレポートは、痛烈に批判、攻撃した文字で、埋められている。

- 12) 籍談は春秋、晉の大夫で、字は叔と称した。もともと籍とは書籍の意であって、簡、史、董とともに、書籍に関する文字を冠して姓としていて、史官を世襲する家柄であった。後出の董仲舒もしかり。

13)

	三墳	五典	八索	九丘
孔安国 尚書序	伏羲・神農・黄帝之書	少昊・顓頊・高辛・唐虞之書	八卦之說	九州之志
周礼春官 外史鄭注	三王之書	五帝之書		
賈逵	三王之書	五帝之典	八王之法	九州亡国之戒
張平子	三礼	五帝之常道	周礼八議之刑	周礼之九刑
馬融	三氣	五行	八卦	九州之數

大漢和辞典 卷一 大修館書店 p. 180

- 14) 注 10) 参照
- 15) 鄭州博物館において、いくつかの統一貨幣とともに、銅權、虎符、鉄劍、鉄鋤等を眼のあたり見て、始皇帝の息吹が感じ取られた。
- 16) 使臣または武將が、そのしるしとして持つ牦牛(やぐ)の羽毛で飾った符節(割印、証摺札等)
- 17) 木、火、土、金、水の五徳
- 18) 郡を治めることを司る守と、守を補佐して、軍務を司る尉。
- 19) 市民の面前で斬殺し、しかばねをさらして、多くものに見せしめにする刑。
- 20)、21) 当時の文書は本文でも触れたように、竹や木に書写されたものである。〔史記、始皇本紀〕にも、帝は政務を執行するに際し、毎日1石(30kg)に相当する公文書を決裁するまでは休息しないことを、自らおきてとしていたことが記載されている。また一方、同じく〔高祖本紀第8〕には、劉季が、絹に書簡をしたためて城内に射ち込んで、沛の父老に申し入れたことが出ているが、ときに秦の二世(209B.C.)のことである。当時すでに白絹を材料にした書き物が通行していたことが、うかがわれる。
- 22) 秦代における刑罰の一であって、罪人の腰部を切り離す刑。〔漢書、司馬遷伝〕のなかに、李斯は五刑、すなわち入れ墨、鼻切り、足切り、宮刑、死刑の全部を順々に加えられてきたことが記載されている。
- 23) その1例：高祖逝世のすぐ前、親征しての帰途、故郷沛に立ち寄って朋友、父兄のほか、児童120人

を招いて、無礼講の大酒宴を開いた。酒宴たけなわのとき、自らも楽器をたたいて自作の詩を歌い、踊って、悲憤慷慨のあまり涙を流したことを伝えている〔史記、高祖本紀第8〕。

- 24) 近藤芳美：一歌人の中国紀行 人民中国 (1982) No. 2 p. 41。なお近藤氏によると、陵墓の東1.5kmのところ、西揚村で、1974年、人民公社の農民が井戸堀りをしていて、地下5mのところから、陶製の武士像があることを発見したのがきっかけで、現在も発掘が続けられていると言う。表情を異にした等身大の武士像、現在約6000体、実物大の馬、木製の戦車等、一軍団さながらに整然と埋蔵されていたさまがうかがわれる。暴政の跡が、いま白日にさらされているのである。
- 25) 先年亡くなった中山大学の杜定友館長は、ヨーロッパ最古の図書分類表と言えば、ドイツの Konrad von Gesner の Bibliotheca Universalis であるが、七略はそれより1500年あまり早いことを指摘してい

る〔杜定友撰 松見訳：図書分類法史略 図書館界 Vol. 10 No. 3 (1958) p. 87〕。これを最近、武漢大学の倪曉建教授が承けて、敷衍されている〔劉向、劉歆与別録、七略 武漢大学図書館学部 図書情報知識 (1980) No. 1 p. 50〕。

- 26) 中国で言う目録学は、Cataloguing ではなくして、Bibliography に近いものであることを、次稿で説明しておいた。〔松見：中国目録学私考 図書館界 Vol. 4 No. 4 (1954) pp. 117-122〕
- 27) また、この間の経緯については、次を参照
- ① 鄭鶴聲、鄭鶴春：中国文献学概要 上海商務印書館 (1930) p. 14-6
- ② 章学誠：校讎通義 北京古籍出版社 (1956) pp. 15-50
- 28) 前掲注 8) の① pp. 123-147
- 近くは錢存訓：中国古代書史 香港中文大学 第7章 (1975) pp. 123-147も、劉先生の説を継いでいる。